

令和6年度岡崎市教育研究レポート

1 8B 保健体育（中）

岡崎市立竜海中学校 稲吉 優志

2 研究テーマ

「ゴール型スポーツの特性にふれ、仲間とともに学び合う中で、

主体的に学び、考えを更新できる生徒の育成」

～中学1年生 球技（ゴール型）・フットホッケーの実践を通して～

3 研究概要

（1）主題設定の理由

中学生は、急速な技術革新や急激な少子高齢化等、社会生活の変化を予測することが困難な時代の渦中にある。さらに新型コロナウイルス感染症の蔓延により、ドリル学習や個人追究を中心とした授業を小学校中学年～高学年にかけて受けてきたことにより、他者との交流機会が減少し、人との関わり方や学校内での学び方の変化による影響を強く受けた世代でもある。その結果、他者の気持ちを考えた発言や行動をとることが苦手な生徒、周囲と協力して粘り強く取り組むことのできる生徒が減少しているように感じ、体育の授業においても課題解決に向け、他者と協働しながら考えを深めようとせず、一部の仲間の考えに頼る生徒が多くいる。

内容及び内容の取扱い等の改善の要点として、学習指導要領には『「運動やスポーツとの多様な関わり方を重視した内容及び内容の取扱いの充実」に、豊かなスポーツライフの実現を重視し、スポーツとの多様な関わり方を楽しむことができるようにする観点から、体力や技能の程度、性別や障害の有無等にかかわらず、運動やスポーツの多様な楽しみ方を共有することができるよう、共生の視点を踏まえて指導内容を示すこと。』と示されている。このことから、授業を受けるすべての生徒が学びの世界に入り込むために、誰もが参加できる・したくなるような学びを用意すること、運動を重ねていく中で「できる」という感覚や「楽しい」という感覚を覚えられるように運動特性を課題の中心におくことが大切だと考えた。また、現行の学習指導要領における基本方針や保健体育科改訂の趣旨及び要点を踏まえて考えられた「客観的に動きを分析し、関わり合いながら課題追究できる生徒の育成」という本校保健体育科のテーマも踏まえて、本研究における研究主題を「ゴール型スポーツの特性にふれ、仲間とともに学び合う中で、主体的に学び、考えを更新できる生徒の育成～中学1年生 球技（ゴール型）・フットホッケーの実践を通して～」とした。

（2）研究のねらい

過去の学習指導要領に示されていた運動の専門性を追求し、運動技能を高めることや強靱な身体、強い意志を身に付けることを目的とせず、本研究では現行の学習指導要領に即して性別や体格、運動経験等の枠を超えて授業に参加するすべての生徒に学びの機会を保障し、自己や他者、モノ（教材）等との関わりを通してスポーツのもつ特性の楽しさを感じられるような授業づくりを考えていく。すべての生徒が基本的な技能を身に付ける・自身の思考を他者へ共有し課題解決へ導く・スポーツに親しみをもつ。これらを実現する為にはどのような教材、授業展開等が効果的なのか明らかにしていきたい。

4 研究の方法

（1）目指す生徒像

運動の特性や魅力に気が付き、自己やグループの状況に応じて運動への関わり方を見つめ直し、考えを更新できる生徒

めざす生徒像における「運動の特性や魅力に気が付き」とは、ゴール型の醍醐味である「突破をする・させない」、「ゴールを決める・決めさせない」といった「突破と阻止」の面白さに気が付き、仲間とともに学びに向かう姿を指す。「自己やグループの状況に応じて運動への関わり方を見つめ直し、考えを更新できる」とは、課題や躓きに対して自分の思考を他者へ共有したり仲間の考えを聴いたりしながら既存の正解の獲得ではなく、オープンエンドな問いに対して考えを更新しながら、グループにとっての最適解を求め、学びを深めていく姿と定める。

(2) 研究の仮説と手立て

仮説Ⅰ 学びの考え方を共有し、教材やルールに工夫を加え、ゴール型種目のもつ特性に夢中になれるような単元計画・授業展開をすれば、運動の面白さに気付くことができるだろう。

手立て①「勝利追求主義」の考え方をもたせる

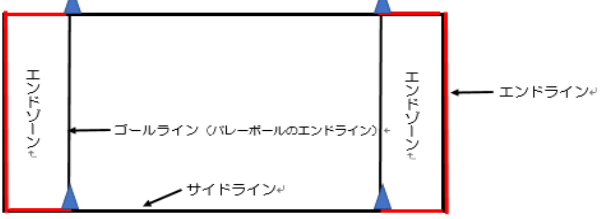
梅澤(2014)によって、スポーツには勝敗がつきものであり、完全に勝敗を排除すると「勝ちと負けの間の心の動き」の面白さを感じにくくなってしまう。そのため、勝利を追求する姿勢を重視し、勝利には時として運や偶然も影響し、敗北も反省材料として受け容れる「勝利追求主義」へのシフトが学習者も指導者も理解することが重要であると述べられている。実践を通じて勝利追求主義の考え方のもと、「勝つためには何が必要なのか、何ができるようになるか、課題はどこにあるのか」を仲間とともに考え、勝利を目指していくことで、運動の面白さに気付くことができるのではないかと考えた。

手立て②「教材やルールの工夫」をする

ゴール型の種目において男女共習での学びを成立させるために不安材料となる「教材の扱いやすさ」と「接触の有無」について考えた。バスケットボールやサッカーのようなゴール型種目に見られる「ドリブル」技能をなくすことで、身体接触が減ることが予想され、男女関係なく参加できる学びの土台を整えることができる。その反面、「ドリブル」でバックを運ぶことができないため、バック操作とバックをもったときの動き、バックをもっていないときについてグループ全員で協働しなければ試合運びが上手くいかない状況が生まれるだろうと考える。また、シュートが決まると1点というルールに加え、仲間からのパスをエリアの中で受けとめることができれば2点という難易度の高い得点ルールを追加したことで、運動が苦手な生徒でも攻撃参加でき、運動が得意な生徒にとっても仲間と協働しなければ達成できない課題となり、どの生徒にも学びが保証され、運動の面白さに気付くことができると考える。

資料①試合のルール

【コート】 バスケットボールのコートを使用。



【ルール】

- コートに入る人数は1グループ4人(グループが5人の場合、出場機会は相談)。
- ドリブルは禁止(ただし、3タッチ以内にバックを出すことは可)。
- バックを保持(アビール or バックを踏む)したら、DFは奪うことはできない。
⇒DFはパスコースを確保するために1M目安で離れる。
- バックを保持したら、5秒以内に出さなければいけない(出せなければ保有権交代)。
⇒5秒カウントは相手グループが行う。
- サイドラインからの直接シュートは点に入らない。
- 同時に保持した場合はじゃんけんや話し合いで保有権を決める。

【得点】

- シュートを打ってコート内の赤色のラインを完全に通過させたら1点(オウンゴールき)。
⇒サイドラインをバックが割ってしまった場合、一度パスしてからシュート。
- パスをつなぐなどして、エンドゾーン内でバックを止めることができれば2点。

※シュートを打ち、バックが空中に飛んだ場合は、ゴールラインにおいてあるカラーコーンよりも高いものは得点は無効となる。

仮説Ⅱ グループを軸とした学習の中で、ペアグループ制を設定して、自分やグループの動きについて振り返りの充実を図ることで、「頭の中でのイメージ」と「実際の動き」を比較し、グループにとっての最適解となる戦術の獲得に向けて仲間と考えを更新することができるだろう。

手立て③「ペアグループ制」を導入する

グループ活動において練習相手を務めることや試合をしているときにタブレット端末(iPad)で試合を撮影してもらうこと、試合中やふり返りの時間に助言を送り合う等、協力体制を整えることで客観的な事実をもとに想像と実際とのずれを認知することができるとともに、多くの仲間と関わりを通して考えを更新することができる。と考える。

手立て④考えや学びを整理する「振り返りの充実」

本時の学習から学んだことを書いてまとめる振り返りに加え、撮影してもらった動画を見て分析する振り返り、作戦ボードを用いて視覚的に動き方を確認する振り返り、話し合ったことをもとに動いて確認する振り返り等、考えや学びを整理する様々な機会を学習内容に合わせて提供することでグループにとっての最適解となる戦術の獲得につなげることができるだろうと考える。

5 研究の実際と考察

(1) 本研究における抽出生徒A

抽出生徒Aは体を動かすことが好きで、授業前には1番初めに活動場所に集合してくることが多く、準備や片付けにも積極的に取り組んでおり、前向きに授業に参加している。しかし、グループの仲間と協働して考えを更新していくことはあまりできていない。また、陸上競技の授業において動画を撮影して動きを分析する時間に、仲間の映像をみて助言を行っていたが、自分の動画を見て考えることはせず、自己

の学習状況を把握しようとする姿は見られなかった。陸上競技の特性である「競争の楽しさを味わうこと」はできていたと見取ることができたが、もう一つの特性である「記録の向上に挑戦」するために基本的な技能の見直しや効率の良い動きを身に付けようと、運動の特性に気付き、学びを深めていくことに課題が見られた。この生徒Aがゴール型スポーツのもつ特性や魅力に気付き、自己やグループの状況を把握に努め、仲間とともにグループ戦術の獲得に向けて考えを更新していくことができるようにしていきたい。

(2) 単元計画

本単元では、ゴール型の醍醐味である「突破をする・させない」、「ゴールを決める・決めさせない」ということに注目して学習させることで、特性や魅力を味わわせたい。パックの安全性に加え、接触を防ぐためにドリブルを制限すること、パックを踏んでマイボールにする「保持」をしたら相手プレイヤーは奪うことができないという条件も付けてルールにも工夫を凝らしたことで一人よがりなプレーを起こりにくくした。パックを受け取ったり、保持したりすると、基本的に動くことはできなくなり、仲間と連携しないと突破やゴールを決めることが困難になる。また、攻守の切り替えが頻繁に起こり目まぐるしく状況変化が起こるので、得点差や自分・仲間・敵の位置、得点エリアとの距離感など様々なことを瞬時に総合的に判断して最適な選択をすることが求められる。そのため、生徒Aに「突破する&させない」「ゴールを決める&決めさせない」というゴール型スポーツの特性に気付かせ、自分の考えをもち仲間と協働して自己やグループの姿を見つめ直し、考えを更新することができるようにするためには良い単元であるととらえる。

資料②単元計画

段階	時間	学習課題	主活動	本時の終末での生徒の考え
準備段階	①	試合で勝つために必要なことは何だろうか	・学習課題を把握する ・ゲームを行う中で、個人やグループとして何を身に付けるとよいかを考える	試合で勝つためには個人技能を高めていく必要がある グループの仲間と協力して点が取れるようにしたい
	②	試合で生かせるパスについて考えよう	・ボールの蹴り方、止め方のポイントを知る ・パスの正確さやパスを通すために必要な技能について考える	パスを正確に出すために、蹴りやすい所にとめることや足の向きが大切だな 仲間や相手の位置を把握することが大事だ
	③	点を取るための方法について考えよう	・タスクゲームを通して、点を取るために、どのような動きをしたらよいか考える ・相手と対峙しても、パス技能が通用するか考える	相手がいない場所でボールを受けるとゴールに近づけるだろう パスを受けてから、出すまでの早さが大切だ
	④	点を取られないための方法について考えよう	・タスクゲームを通して、どのように動いたら相手の攻撃を止めることができるか考える	ボールを持っている相手を早くマークすることやボール保持者とゴールの間に立つといいかもしれない
	⑤	グループの課題を分析しよう	・ゲームを通して、仲間と連携した動きで、ゴール前での攻防を制するためにはどうしたらよいか考え、分析する	今までパスや動き方について学んできたけど、もっと素早くボールを回したり、空間を見つけたりして試合ができるようにならないといけない
	⑥	グループの課題を克服し、さらに試合で勝つにはどうしたらよいだろうか	・弱点を補強し、勝つためにグループに必要な練習を考え挑戦したり、動きの確認をしたりした後、試合を行う	仲間と考えたことを意識して取り組んだら、前より試合運びがよくなった
実践段階	⑦	相手チームよりも多くの点をとるにはどうしたらよいだろうか	・グループで作戦を立てた上でリーグ戦を行う	仲間と連携のとれた動きで相手のマークをかいたり、奪われないようにしたりすることが大切だ
	⑧	試合で勝つために必要なことは何だろうか	・運動の取り組み方や課題解決の方法について考えて、レポートを作成する	パスの正確さやスピードはボールをつなぐために大切な技能だ 空いた場所に動いたり、パスを出したりすることは他のゴール型球技でも生かせそう

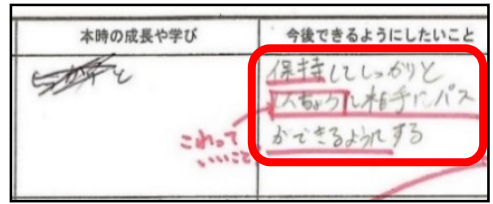
(3) 研究の実践と考察

【第1時】誰もが初めて出会う「フットホッケー」であるが、いきなり「試合に勝つために必要なことは何だろうか」という学習課題のもと学びに向かわせた。基本的なルール説明を行い、その後の全体とのやり取りの中で、早速生徒Aはスポーツの特性の一つである「勝ち負け」について発言(資料③太字)しており、スポーツには勝ち負けがあるものだという認識をもっていることがわかる。さらに学習課題提示後に「勝てばいいの?」と発言していることから「勝ち」への意識づけをすることができたといえる。しかし、「簡単じゃん」という発言から考察すると、授業において学び方次第で手立て①の「勝利追求主義」の考えではなく、「勝利至上主義」の方に考えが寄ってってしまう恐れがある。そのため、仲間とともに

T: スポーツの特性には何ががあるかな?
A: そりゃ勝ち負けでしょ。
T: 他にはどうですか?
S: 仲間と協力できる。
T: 他は?
S: 体を動かすと楽しい。
T: なるほどね。さっき仲間と協力ってBが言ってくれたけど、協力の仕方にはどんなものがあるかな?
A: 準備や片付けを速んで行う。
S: グループで話し合う時間に思ったことをみんなで伝え合う。
S: できる人に頼るんじゃなくて、一人ひとりが頑張る。
T: どれも大切なことだね。スポーツにはAが言ってくれたように勝ち負けがあるけど、どのグループにも、勝ちを目指すという姿勢を大切にしてもらいたいです。ということで今日の学習課題は「試合で勝つために必要なことは何だろうか?」です。
A: 勝てばいいの?簡単じゃん。
T: 勝ちを目指してください。ただ、男女混ざったグループで試合をするから?
S: ルールを守る。
T: そうだね。周りの人たちのことも考えてプレーできるといいね。それでは試合の準備に移しましょう。

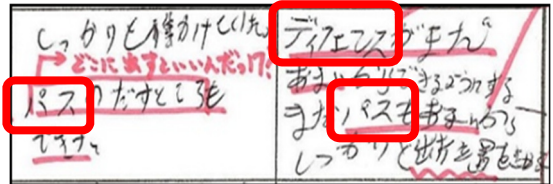
資料③ルール説明後の全体とのやり取りの記録

に考え勝利を目指していけるように導いていく必要性を感じた。説明後、生徒Aはパックをもってすぐ試合の準備に取り掛かり、グループの仲間や対戦相手の生徒に対して試合前の整列を呼びかける姿が見られ、早く運動したい、挑戦してみたいという意欲の高さが伺えた。また、授業終了後の振り返り用紙（資料④）を見てみると、本時の学びについての記載はなかったが、今後できるようにしたいことに「保持してしんちょうに相手にパスができるように」と記載している。このことから、生徒Aが相手にとられずに安心してパスという技能につなげられる「保持」というルールの有効性を感じられたことがわかることから、手立て②が有効に働いていることがわかった。しかし、本時の学びが空欄であることから、学びを整理して書くことはあまり得意ではないといえる。学びを見つめ直すために重要な振り返りも自分の言葉で書いてまとめることができるように、次時以降の変容を追っていきたい。



資料④第1時を終えた振り返り

【第2時】前時にフットホッケーを初めて経験して、自分だけでなく、仲間が感じた課題や躓きについて知ることは今後の学習に見通しをもつためにも必要だと考え、全体共有する場を設けた。パス回し、攻撃、守備等の様々な意見がたくさん出てきた。出てきた意見の中から意図的にパスを取り上げ、「試合で生かせるパスについて考えよう」という学習課題を提示した。グループ活動では生徒Aがパックを浮かせて蹴る姿が前時に見られたこともあり、グループの仲間から「パスはつながらないし、危ないしやめよう」と提案された。生徒Aは、「ごめん」と答え、仲間の声に寄り添うことができたといえるため、誰もが運動に参加するために大事な考え方に気づくことができたといえる。生徒Aは「パスの出すところもできた」「パスがあまりからしっかりと出す方向を決める」（資料⑤）と記載したように、学習課題を頭に入れて学びを追求した結果として自分の考えをもつことができたこともわかる。パスの出し方を教師から一方的に教えられる学びでなく、試合を経験したからこそ得られる「ディフェンス」というパス以外についての新たな課題意識の芽生えが生じたこともわかることから、生徒主体の学習活動が新たな課題意識を引き出したといえるだろう。

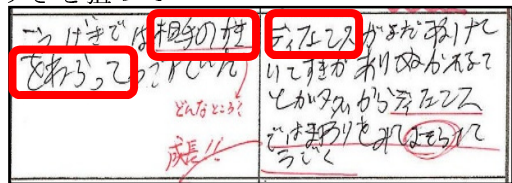


資料⑤第2時を終えた振り返り

【第3時】学級生徒の振り返りからパスに対して一定の躓きを感じた生徒が多くいたため、解決の方法について考えを深めてもらいたいと考え、導入の課題提示において資料⑥のような写真を全体に提示し、パックをもっているチームに注目して、「パスを出せずに困っているけど、どうする？」と問いかけると、「パックをもっていない人が動く」「空いている場所にパスを出して走らせる」といったつぶやきが出てきた。「じゃあどこに、どう動いたらいいんだろうね、グループで考えてみて」と伝え、資料⑥をグループに1枚配ると、紙をグループで囲むようにしてペンを使って矢印を書き込む姿が見られ、関心をもってグループ毎に考えを整理することができたのではないかと考える。本時では「点を取るための方法について考えよう」という学習課題を提示し、すぐグループ活動に入らせた。試合間の時間を見つけて、生徒Aは「みんな切り替えのタイミングとかリスタートするときとかのすきを狙っていい」と発言し、点を取るという学習課題を頭に入れて考え、自分なりの考えをグループの仲間伝えることができていた。しかし、試合ではバックが上手くつながらないケースが目立ち、相手に大量得点されることになり、苛立ちをあらわにして独りよがりなプレーが見られ、仲間と協働することに未だ課題が見られる。資料⑦の記載から、生徒Aは学習課題に対して「相手のすきをねらう」という考えをもつことができたといえる。



資料⑥課題提示の写真



資料⑦第3時を終えた振り返り

【第4時】生徒Aが3時間目に見せた苛立ちは、自分の頭のイメージが仲間と共有できていないことだと考え、全員が動きのイメージを共有できるように作戦ボード（資料⑧）を導入した。「点を取られないための方法について考えよう」という学習課題の提示後すぐにグループ活動に入ると8班中6班がすぐに作戦ボードを手に取り、人型マグネットを動かしながら守り方について考えていた。生徒Aも課題に「ディフェンス」を挙げていたこともあり、グループの中心となって、自分の考えをマグネットを動かしながら仲間へ伝えていた。伝え終わると、穏やかに「お前は どう思う？」などと言ってグループの仲間の考えも聴き入れながら、仲間とともに考えを更新しようとする姿が見られ、作戦ボードでの確認は生徒Aの躓きの解消となったことから、手立て④が有効に働いたといえる。試合後の振り返りでは「まわりをみえてきて攻撃を封じられている」と記述しており、グループ活動において仲間と話し合ったり、作戦ボードを用いて確



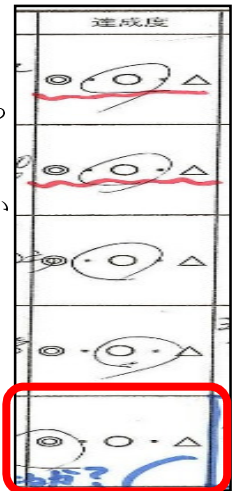
資料⑧作戦ボード

認したりする等、考えや学びを整理したことで、バックの動きだけでなく人の動きにも注目して試合運びができるようになったことで、攻撃を封じるといふ成果を得ることができたといえる。また、グループでの振り返り時間には資料⑨のようにボードを中心に顔を近づけてグループの仲間と話し合う様子が見られ、戦術の獲得に向けて仲間と考えを更新しようと学びに入り込んでいるといえる。



資料⑨ 作戦ボードを用いた話し合い

【第5時】「パス、攻撃、守り」と初回の授業で生徒が課題や躓きとして挙げていたことを各1時間ずつ学習してきた。本時から8時間目にかけては、グループの特性を生かしたり、課題の克服をしたりしていき、必然性高く勝利を得られるように学習に取り組んでいく。「グループの課題を分析しよう」と学習課題を定め、運動は1試合のみに絞り、グループの良さや課題について客観的意見や事実に基づき、考えを深めることを目的として、運動量については割り切る1時間とした。試合後の分析については、①ペアグループに撮影してもらった試合動画を見て課題等について具体的な分析をする。②ペアグループでお互いに試合を見て感じたことを伝え合う。③本当に必要だと感じることの改善に向けて、次時に行う練習計画について考える。といった順で学習させた。①では、動画を見ると生徒Aが前時の課題として考えていた「仲間がバックにかたまってしまう」ということが攻撃、守り両方において起こっていたことをグループ全員が理解した。②では、ペアグループの仲間から、「バックにかたまっている。かたまらないようにするために、誰かがバックをもったら、とりあえず空いている場所に向かって走ってみたいんじゃないか？」という考えを生徒Aは聞きながら聞く姿があった。③では、「空いた場所」を課題に掲げた。「空いた場所に向かうためには相手が必要」という話になり、ペアグループは、「パスをつないでいろいろなパターンでプレーができるようにする」という課題設定をしたため、次時のグループ活動は「試合形式で動きを確認する」ことに決まった。課題分析から、次時の課題克服に向けて考える学習過程は、動画を自分たちの目で見て確認したこと、ペアグループの仲間から客観的に見て感じたことの内容が一致していたことで、生徒Aを含めグループ全員が課題を強く認識することができ、解決の糸口をつかむことができたと考えられる。また、資料⑩の目標達成度に初めて◎をつけたことから、本時の学びが生徒Aにとって納得のいくものであったと見取ることができる。このことから、ペアグループの仲間から試合中に声掛けをしてもらったり、振り返りの時間に試合の様子や解決に向けた助言をもらうといった手立て④は生徒Aやグループの仲間から明確な課題を与えることができたといえる。



資料⑩ 目標達成度自己評価

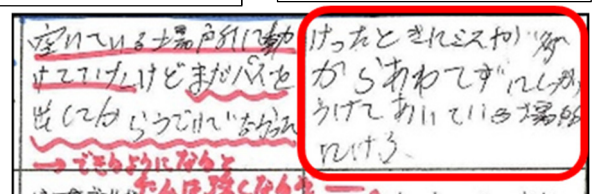
【第6時】試合形式練習中に相手にパスをつながれ続けて失点、自分のグループはパスを出せずに取られる等なかなかうまく機能せず、生徒Aは苛立ち、プレーが単調になってきたところで生徒Aのグループを集めて課題の再確認を行った。確認後は、ペアグループのコートサイドからの声も聞きながら資料

⑪のようにバックをもっている相手だけでなく、仲間の位置やバックをもっていない敵の位置、空いている場所等にも意識をグループ全員が強くもって試合時間いっぱい取り組む姿が見られた。運動の面白さである「突破する&させない」「ゴールを決める&決めさせない」ということに没頭している真剣なまなざし、仲間とコミュニケーションを図りながら懸命にプレーする姿を見取ることができ、正しく課題意識をもたせたことで手立て①③が有効的に働いたといえる。授業終了後の振り返り用紙(資料⑫)を見ると、「けったときにミスが多いから」と自分も含めてグループの課題が残っていることを認識していることがわかる。また、「あわてずにしっかりあいている場所に行く」との記載からは、苛立ってプレーが単調になってしまったことを反省し、冷静に状況を考えプレーすると正しく学びに向かえることを学んだことがわかる。勝ちたいという気持ちが強いことは大切なことで、目まぐるしく状況が変化するゴール型スポーツだからこそ、うまくいかないことも反省材料として受け入れ、なにができるようになるか(学習課題)をしつかりと考えてプレーする大切さを学んだことから手立て①が有効に働いたといえる。



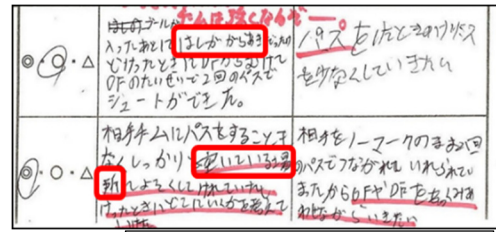
資料⑪ 話し合い後の動き

資料⑫ 第6時を終えた振り返り



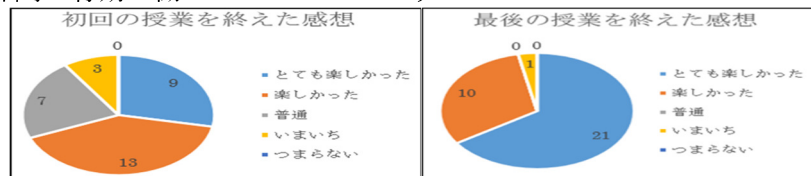
【第7・8時】ただリーグ戦を行うのではなく、毎時間設けているグループ練習の時間は確保した。生徒Aのグループは「パスの受け取りミスを減らすこと」と「空いた場所にパスを出す、走り込むこと」を課題に掲げていた。同じ課題が続いたため、「別の課題はないの？」と問いかけると、「勝つために自分たちの1番の課題はこれですから」という返事が生徒Aから返ってきた。同じグループの別の生徒に聞いた

が、「私たちはこれがなかなかできないから」と言っており、課題の共通認識を図りながら学びを進める成長を見取れた。また、生徒Aの振り返り用紙（資料③）を見ると、7時間目終了後の課題に「パスをしたときのけりミスを少なくしたい」と書かれており、「空いた場所」へのアプローチについて課題が発展している。グループの仲間も個人で振り返りを記入しているにも関わらず、中心となる言葉にグループの課題である「空いている場所」という記述が全員に見られた。このことから、勝利をつかむためには何が必要なのか、何ができるようになると良いのかをグループの仲間とともに考え続け、運動の面白さや仲間と学ぶ楽しさに気づき、粘り強く学習に取り組むことができたことがわかり、手立て①が生徒Aや仲間にも有効に働いたといえるだろう



資料③第7・8時を終えた振り返り

【第9時】レポート作成と授業を終えたアンケートを実施した。結果は資料⑭のとおりである。満足群を「とても楽しかった」「楽しかった」と回答した生徒としたときに、初回は約69%



資料⑭アンケート結果

であったが、授業を終えた後には約97%となっており、この結果からフットホッケーを教材とした学びが生徒たちに楽しさを与えたことがわかる。

6 研究のまとめ

(1) 仮説Ⅰに対する手立ての検証

手立て①について、学習課題は「勝利」を得るために必要なことを考え設定していることを第1時で伝え、生徒Aは第1時の資料③における発言から「勝つこと」に対して簡単なものと認識していたが、第8時の「勝つために自分たちの1番の課題はこれですから」という生徒Aと教師のやり取りから、上手いかないことも反省材料として考えられるようになったことがわかる。この考え方の変化から課題を明確にもって仲間とともに勝利を目指すことの運動の面白さに気付けたといえる。

手立て②について、単元前に心配していた「接触」について、授業を終えて授業クラスだけでなく学年全クラスで見ても大きなけりは発生しなかった。また、資料⑭や11月の寒い時期にも関わらず、授業後に汗をタオルで拭いたり、ビブスについた汗を気にしたりする生徒が多くいたことから、「突破&阻止」に夢中になって取り組めたといえるだろう。また、運動が苦手な生徒も授業後のアンケートで「私のように運動が苦手・嫌いな人はどうしても最初はやりたくないって思うだろうけど、授業を通して楽しさが少しずつ分かってきた」と記述しており、学びに参加して種目の楽しさや仲間と体を動かす楽しさを味わえたと理解できる。

以上から、手立て①②が有効的にはたらき、生徒は運動の楽しさや面白さに気付くことができたといえることから、仮説Ⅰは立証されたといえる。

(2) 仮説Ⅰに対する手立ての検証

手立て③について、第5・6時の学習が本単元におけるペアグループ制の軸となる授業であった。グループの考えと試合中コートの外から見ていたペアグループの意見が一致したこと、試合中もコートサイドから指示を出し一緒になって戦ったことは「想像」と「実際」のずれを認知し、考えを更新することにつながったといえる。生徒Aのグループからペアグループに与えた効果についても注目して考察を加えることができるよかったと反省している。

手立て④について、生徒Aは資料⑦では「相手のすき」と表現をしているが、終末段階の資料⑫⑬では「空いた場所」と表現が変わっており、攻撃における課題が「空いた場所」だということを明確にすることができた。さらに、生徒Aのグループは最後まで「空いた場所」という課題に苦戦しながらも勝利に向けての重要な課題であることを把握した上で、粘り強く学び続けた。特に作戦ボードの活用、動画を見て学ぶ機会はグループ課題の追求には有効であったと考える。その反面、グループの課題を追って学びを深めていく姿を見取ることができたが、生徒A個人の課題とグループの課題とのつながりをもたせて考えるところまで学習展開ができなかったことが反省として残った。学習カードも含め、個人課題とのつながりを明確にする指導の在り方を検討していきたい。

以上から手立て③④が有効であり、グループ課題における最適解の獲得に向けて学びを深めていくことができたといえることから、仮説Ⅱは立証されたといえる。

今回の研究のねらいである、すべての生徒に学びの機会を与え、運動の特性を味わわせられるような教材開発については活動の様子や振り返り、アンケート結果等から満足いくものとなったが、学びをより深めていくための仲間と学び合う環境づくりや集団スポーツにおける個人課題とグループ課題とのつながりの明確化についての指導方法について今後の課題として検討していきたい。